

有田川町内における学校循環型授業研究の発展

研究代表者：宮橋 小百合（和歌山大学）

共同研究者：南垣内 智弘（和歌山大学）

有田川町立藤並小学校 校長 川岸 俊夫
 教頭 安井 健晃 教諭 嶋田 成暁
 有田川町立小川小学校 校長 古川 弘樹
 教諭 山田 沙紀
 有田川町立鳥屋城小学校 校長 坂本 利文
 教諭 平松 朝子
 有田川町立御霊小学校 校長 小切 佳生
 教諭 寺中 誠
 有田川町立田殿小学校 校長 森 早百合
 教頭 福井 健太

はじめに

筆者らは、2019年から有田川町内の小学校3校と連携し、「インストラクショナル・ラウンズ（以下、IR）」の手法を用いた授業研究を行ってきた（廣瀬ら，2019；宮橋ら，2021）。2021年にはさらに発展させ、有田川町内の5つの小学校で研究授業を順に実施し、それぞれの学校に互いに訪問してIRの手法を用いて研究授業を行った。有田川町内でも、学校の小規模校化が進み、1学年1学級規模の学校が増加することで、教師同士で教材研究し合う機会が減り、授業を参観し合う機会も限られてしまう。このIRの取組により、町全体を見通した学校間連携を促進し、現職教育の活性化や若手教員の育成が促進されることを本研究の目的としている。

1. 調査実施日と調査協力者

2021年11月に実施したIR授業研究では、5校からそれぞれ授業者と、授業を参観・分析するIRメンバーを推薦してもらった。例年よりも参加校が増えたため、一番学校規模が大きい藤並小学校を中心として藤並小・田殿小・御霊小の3校で第1ラウンド、藤並小・鳥屋城小・小川小の3校で第2ラウンドという2つのラウンド形態をとった。

表1：5校のIR実施日とメンバー

| 日時 | 学校 | 参観授業 | IRメンバー |
|--------------|-----|----------------|---|
| 11/12 (金) | 田殿 | 5年生国語 | @福井（田殿） ・嶋田（藤並） ・寺中（御霊） ・現職院生 |
| 11/16 (火) | 藤並 | 5年生国語 4年生算数 | @嶋田（藤並） ・福井（田殿） ・寺中（御霊） ・平松（鳥屋城） ・山田（小川） ・現職院生 |
| 11/18 (木) | 御霊 | 5年生国語 | @寺中（御霊） ・福井（田殿） ・嶋田（藤並） ・現職院生 |
| 11/19 (金) | 鳥屋城 | 6年生算数 (2学級) | @平松（鳥屋城） ・山田（小川） ・現職院生 |
| 11/22 (月) | 小川 | 4年生算数 | @山田（小川） ・平松（鳥屋城） ・嶋田（藤並） ・現職院生 |

第1・第2ラウンドには、それぞれ別の2校から教諭が1名ずつ参加して参観・分析を行った。藤並小でのIR授業研究の時は、5校すべての教諭が参加した。分析の手法は、上述の通りIRの方法を用いて行った。

また、手法の特徴上、参観・分析する人数が複数名必要となるため、和歌山大学教職大学院の現職院生3~4名ずつに参加協力を依頼した。現職院生9名全員が2校ずつ参加できるようになったため、大学院の実習科目として位置づけることになった。そのため、柏野貴之特任教授と南垣内智弘教授が同行し、IRの実施をサポートしてくれた。

各校の授業提供者についても、例年通り2名ずつ提供するのが難しい学校もあったため、第1ラウンドの3校は5年生国語で統一、第2ラウンドの2校は4年生算数で統一、1校は6年生算数の2学級で統一させ、なるべく授業者同士で事前に教材研究ができるように設定した。授業者同士で教材研究について相談し合えるように、事前の打ち合わせの会を8月に実施した。

新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大に伴い、2021年も授業参観時に教室内に外部者が大

勢入ることを避けるため、直接参観はせず、ビデオ撮影した授業の様子を見て記録を取るという手順で実施した。

2. 田殿小学校でのIR研究授業の実施

田殿小学校をホスト校とする研究授業では、5年生の国語の授業が提供された。田殿小学校では、昨年度から「自ら考え表現する児童の育成」をテーマに校内研究を進めているという。思いや考えを伝える機会を重視しており、話すことに対して児童の苦手意識は減っている部分もあるが、特に国語科は読み取る力に課題を感じているということであった。

ビデオによる視聴後、分析を行った結果は表2の通りである。提供された1つの授業をもとに、学校の研究テーマである「自ら考え表現する児童の育成」に関連して、どういう場面が見られたのか、IRメンバーで付箋に書き起こし、時系列に整理した。それらの付箋をもとに、研究テーマに関わる成果と課題について分析を行った。課題と考えられるパターンは2つ見出された。

表2 田殿小学校での分析の結果(展望シート)

| 課題と考えられるパターン | 課題が発見された授業場面 |
|---------------------------|---------------------------|
| ① 対話の時間確保 | ① 12:07頃にペア活動(残り8分) |
| ② 対話のための個人の準備(個人思考) | ② 発問・指示の後に教師がたくさん話してしまう |
| 課題の解決に対して我々の学びを前進させるための提言 | |
| (短期的) | (長期的) |
| ① 単元を見通した授業設計 | ① 対話する経験の積み重ね+必然性のあるテーマ設定 |
| ② ワークシート等による個人思考しやすくする支援 | ② ファシリテーターとしての教師のあり方 |

分析では、授業の「めあて」と「まとめ」に生じた「ズレ」の要因はどこにあったのか等を中心に協議された。特に、本時の主なねらいである「対話」を授業時間内のどこに位置づけ、どのような活動

にできただろうかということについて話し合いがなされ、そこから表2のパターン①とパターン②が出された。

分析結果の報告会では、授業者からの振り返り

についてコメントが得られたが、その中には、分析で出された課題に関する発言があった。そのため、我々が分析したパターンについて、授業者には課題として認識されていると考えられる。また、1つの授業の分析だったにもかかわらず、学校の研究テーマを実現するための課題として認識され、後日ホスト校内の校内研修において課題について話し合う機会が設けられたということであった。

3. 藤並小学校での IR 研究授業の実施

藤並小学校をホスト校とする授業研究では、4年生の算数と5年生の国語の授業の2つが提供された。ビデオによる視聴後、分析を行った結果は表3の通りである。

ホスト校では、「伝えたい・比べたい・つなげたい子の育成」というテーマをもって、対話的な学びを向上させるため、低学年では「伝える」、中学年では「比べる」、高学年では「つなげる」という発言に応じた目標をもって授業づくりを行っている

という。低中高の各段階で、課題やめあての設定、具体物や視覚化の工夫、子ども同士での比べる・つなげるための指導等を用いて、教科に応じた対話を生む視点を心がけているということであった。

2つの授業は、テンポよく進められており、視覚化や話し合い時間の確保も意識されており、普段からそれらを意識した授業が行われていることがビデオから読み取れるという話が協議の中で出てきた。ホスト校の研究テーマである対話的な学びの向上という視点から分析を行うと、表4のように、子ども同士の発言のつながりがもっと行われて、子ども同士が比べ合ったり、つなげたりできれば、より対話的な学びになるだろうという話し合いになった。

また、授業提供者の2人に分析結果を報告した際に、報告の前に授業者が行ったコメントには、IRチームが分析した課題パターンである「子ども同士の発言のつながり」について言及された。

表3 藤並小学校での分析の結果（展望シート）

| | |
|------------------------------------|--|
| 課題と考えられるパターン | 課題が発見された授業場面 |
| 子ども同士の発言がつながってほしい | 5年生：まとめの場面（教師がまとめてしまう） 4年生：まとめの場面 |
| 課題の解決に対して我々の学びを前進させるための提言 | |
| （短期的） 子どもの発言の大事な部分やキーワードを板書しておく | （長期的） 聞くとき・話すときの姿勢や立場（教師も子どもも） →比べる・つなげる（ちがって…似ていて…） |



図1：ビデオ・モニタによる参観の様子



図2：分析後の報告会の様子

4. 御霊小学校での IR 研究授業の実施

御霊小学校をホスト校とする授業研究では、5年生の国語の授業が提供された。ビデオによる視聴後、分析を行った結果は表4の通りである。

ホスト校では、「主体的に学び、確かな学力を身につける子どもの育成—できる・わかるが実感できる学習」というテーマで校内研が進められており、目指す子ども像として「主体的に学ぶ」、「根拠と共に伝える」、「確かな学力」という3つのキーワードが挙げられた。特に算数科に力を入れており、めあて、個人思考、グループ思考、一斉学習、まとめ、振り返りという流れをスタンダードとした授業づくりを意識し、テンポのよい展開や習熟の時間の確保に努めているという。一方で、国語科では「読むこと」に課題があるという認識だった。

分析では、3つのキーワードに関わってどのような場面が見られたか、話し合われた。テンポの良い展開や子どもへの声かけによって子どもの意欲を喚起しており、「主体的に学ぶ」姿に繋がっている

のではないかと、また既習事項と結びつける発問をしてから「書く」活動につなげている点などが「確かな学力」に、ペア活動で理由を伝える姿には「根拠と共に伝える」ということに繋がっているのではないかとということが話し合われた。一方で、本時の展開で中心となる「書く」活動に割かれる時間が少なかったことから、表4のような課題と提言が導きだされた。既習事項の確認に時間がとられ、本時のメインとなる活動時間が確保できない授業展開は、多くの教師にとっても課題となりやすい。国語科で既習事項をどのように積み上げていくのか、児童の発達に応じて各学年で何を習熟させるべきかについて、学校全体で話し合い、共有されれば、「確かな学力」の形成につながり、かつ毎時間の目的に応じた活動時間の確保にもつながるのではないかと協議された。その意味でも、ホスト校の IR メンバーには、授業者1人の課題というより、学校全体の課題として認識された様子であった。

表4 御霊小学校での分析の結果（展望シート）

| 課題と考えられるパターン | 課題が発見された授業場面 |
|------------------------------------|---------------------------|
| 書く時間の確保 + 書いた内容の交流 | 要旨を書き出す時間が12:14～（残り6分） |
| 課題の解決に対して我々の学びを前進させるための提言 | |
| （短期的） 「書く」がメインの時間であれば、他の活動を精選する | （長期的） 既習事項を積み上げて習熟をめざす |

5. 鳥屋城小学校での IR 研究授業の実施

鳥屋城小学校をホスト校とする授業研究では、6年生の算数の授業が2つ提供された。ビデオによる視聴後、分析を行った結果は表5の通りである。

ホスト校では、「考える力の育成を図る算数の授業づくり」というテーマで校内研究が進められている。前年度は、思考力・表現力であったが、児童

には「見通しをもって課題意識を持ち、粘り強く考える」ことに課題があるのではないかと校内で話し合われた結果、一度「考える力の育成」に立ち返ろうということになり、テーマが設定されたという。そのため、ノート指導など、「考える力」をつけるために有効な手段を各教員が設定して取り組んでいる。

2つの算数の授業を観察して、グラフの見方や前時の確認などの基本的なことの確認がなされている点や、授業の展開がスモールステップになっている点等が共通パターンとして挙げられた。協議の中では、これらのパターンが考える力の基礎につながるだろうと分析された。一方、課題と考えられるパターンとして、子ども同士の反応が少ない点が挙げられた。IRメンバーからは、教師に与えられた課題をこなすだけの授業ではなく、課題に取り組む子どもに、教師が伴走するようなスタン

スになれば、より子どもの考える力の育成につながるのではないかと話し合われた。そのため、子ども同士でのやりとりや反応が増えるための手立てが、短期的・長期的な提言として挙げられた。報告会の際には、授業者の2人からも、11月という2学期の半ばまで授業を行ってきて、次のステップとして子ども同士で話し合いながら考え、進める授業の展開を目指していけるのではないかと、という前向きな意見も聞かれた。

表5 鳥屋城小学校での分析の結果（展望シート）

| 課題と考えられるパターン | 課題が発見された授業場面 |
|--|--|
| 子ども同士のやりとりが増えるといい | 1組：前に出て発表する子→先生に向けて説明している。 2組：教師→子ども、のやりとりが多い（11：48～） |
| 課題の解決に対して我々の学びを前進させるための提言 | |
| （短期的） ・教師がつなぐ ・「～さんと似ていて…」 「～と違って…」 という発表を励ます ・発表時に皆の方を向く | （長期的） ・教師が手放す→子どもがつなぐ ・子ども同士で考え合いたくなる課題設定 |

6. 小川小学校での調査（研究授業）実施

小川小学校をホスト校とする研究授業では、4年生の算数の授業が提供された。ビデオによる視聴後、分析を行った結果は表6の通りである。

分析では、ホスト校の研究テーマは「わかる・できる・のびる授業づくりを目指して」であり、そのキーワードになっている「焦点化・視覚化・共有化」という3つに関わって、授業について協議された。提供された授業では、視覚化、共有化ともに意識されている様子が多く見られたため、他の実施校での分析よりも多くの付箋を貼りながらの分析となった。その一方で、本時で焦点化すべき部分はどこだったのかについて、議論された。前時との差がある部分、すなわち本時の特徴となる学習内容につ

いて、児童が解答するための手立てが少なかったことが、適応題が解けない児童の姿につながったのではないかとということが話し合われた。この焦点化されるべき部分が把握されないと、何を視覚化して、共有させるのかの手立ても変わってくるようになるため、課題として、本時のねらいを焦点化し、そのねらいを貫く授業展開とすることが挙げられた。

ホスト校のIRメンバーからは、授業者と一緒に本時のねらいについて事前に相談し合って決めたのに、焦点化しきれていなかったのか、どうすれば毎時のねらいを焦点化できるのか、という疑問が示された。この疑問の解決には、この研究の主旨である、小規模校でも「教師が学び合う関係づくり」

の構築が不可欠であろう。ねらいの焦点化という課題に至ったのも、IR メンバー内でそれぞれの教職経験に基づいて熱心に議論された結果であった。また、授業提供者の授業そのものが、研究テーマを意識されて計画・実行されたものであるからこそ、協議の議論が深まった。この IR 授業研究の取組み

のように、教師同士で学び合う関係が構築でき、議論し合うような機会が重ねていけば、より研究テーマや目指す子ども像の実現に応じた授業や指導に近づくと考えられる。その萌芽が見られるような協議であった。

表 6 小川小学校での分析の結果（展望シート）

| 課題と考えられるパターン | 課題が発見された授業場面 |
|---|---|
| 焦点化したねらいと貫く授業展開 | 個人思考の時に関係図をかけない子どもが見られた |
| 課題の解決に対して我々の学びを前進させるための提言 | |
| (短期的) ・めあて・発問に「考えよう」を使わない ・既習事項を提示して生かす | (長期的) ・単元を見通す ・学年をつなげて考える <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 10px;"> } 育成したい力の 設定と構成 </div> |

おわりに

今回の調査では、5校が参加する昨年度よりも大きなものとなった。IR メンバーだけでなく、授業提供者も含めて、互いに顔見知りの教諭同士であったり、互いの学校に勤務経験があったりしたため、事前の教材研究も実施され、ホスト校の研究動向や児童の実態を踏まえた分析をより行うことができたと思う。報告会後に授業提供者に実施したアンケート調査で、「短期的・長期的な提言について有効だったか」という問いに、全員が「5非常に当てはまる」「4まあまあ当てはまる」と回答した。

その一方で、今回の調査で初めて、提供される授業が1つという学校があり、その授業から学校の研究テーマに即した分析を行うことの難しさも感じられた。実施後に行った IR メンバーへのアンケート調査でも、1つの授業から分析すること、学校の研究テーマに即して分析することが難しいという記述も見られた。

また IR 授業研究の後に、各校で提案された課題や展望についてどのように受け止められたのかについては、本紙面ではその詳細を取り上げられな

かった。2021年度の学期末に IR チームのメンバーに再度聞き取り調査を実施する予定であり、校内研修等における調査結果の活用等について聞き取りを行い、本実践の成果と課題について検討していく。また、実習科目の一環として参加した大学院生がどのような学びを得たのかについても今後検討していきたい。

引用文献

・廣瀬真琴・森久佳・宮橋小百合（2019）Instructional Rounds の日本における試行と評価，鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編，第 70 巻，249-261 頁。

・宮橋小百合・川岸俊夫・安井健晃・九鬼正志・古川弘樹・服部真子・川口久仁・寺中誠（2021）有田川町における学校循環型授業研究の推進，和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書，2020，196-201 頁。

【注】本研究は、科学研究費助成事業基盤研究（C）「学校を超えて学び合う現職教育の組織化に関する研究」（20K02856）および「専門的な学習共同体のネットワーク化に関する実証的研究」（21K02241）の一環として実施した調査の一部である。